

新世紀ミュージアム

ネパールに暮らす一四の民族による、自文化を表現した手づくりの展示ブースなどが並びネパール民族誌博物館。開館から一四年、さらなる発展が期待される当博物館が創設された背景や存在意義について考える。

一九世紀、欧米において広範に設立された数々の民族学博物館は、植民地主義やオリエンタリズムへの批判、あるいは文化をある集団に備わる変わらないものにとらえる視点（文化の本質主義）への懐疑などから、現在は一般に形勢がよくない。統廃合の憂き目を見た博物館もあるなか、多くの民族学系の博物館では古色蒼然としたイメージから脱しようと、名称を変えたり、展示の手法を大胆に見直したりする改革にとりくんでいる。

他方、非西諸国においては、二〇世紀末から二一世紀に入り、先住民の文化と権利に対する認識の向上や民族のアイデンティティの高まりを背景に、次々とあらたな民族学博物館が建ち始めている。その多くは特定の民族集団が直接、設立や展示にかかり、西欧で疑問視されている、民族の独自の文化を静態的に展示する手法が、さまざまな権利要求などの政治的主張と相

まって戦略的に採用されている。つまり、文化がある民族のものとして困い込まれ、政治的に利用される過程のなか、民族の当事者による、当事者のための博物館の誕生というあらたな潮流がある。

国民としての民族の博物館

二〇〇三年に開館したネパール民族誌博物館は、ネパールにおいても増えてきた民族学系の博物館の嚆矢とよべるものだ。同館はネパール語でネパール・ラーストリア・ジャーティーヤ・サングラールヤ（国民民族博物館）という。そこには国民の一員である先住民という国内向けの主張が込められており、他方、国外向けには英語で民族誌的と称し、文化人類学の先端的な博物館であることが謳われる。ラーストリア、すなわち英語でいうナショナルは、国立とも翻訳できることばだ。だが、この博物館は文化・観光・民間航空省

い素材となる。開館時、マガール、グルンなど一四の民族のブースから始まった同館は、二〇〇七年にラウテ、レプチャ、ディマールが加わり一四の民族の展示で構成される。ネパールには政府公認の民族が五九あるの、まだ道半ばだ。各ブースは、生活用品をあしらった室内の再現展示や伝統的な家屋のモデルなどで、それぞれの民族の特徴的な生業や信仰が表現される。

それぞれの展示コンセプトと構成を考え、調査・収集と展示を担ったのは、博物館が委託した各民族協会が選任した当事者である。彼／彼女らは、日本の国際交流基金アジアセンターの助成により、民族の伝統的な生活が典型的なかたちで

示されていると判断した村の調査をおこない、資料の収集にあたった。ブース内のマネキンに向かって、目を細めながら「息子とうちの嫁だ」と愛情を注ぎ、手をかけた展示は、プロの演述業者が作るそれとは異なるほのぼのとした雰囲気に満ちている。民族協会は民族の言語・文学、民族衣装、歌舞、伝承などの文化を見出し、発展と継承を促す活動をしているが、博物館はその披露の場のひとつとなっている。

高邁な理想のあらわれ

一四の民族の展示の他に、先住の民族ではない高カーストのブラーマンが執りおこなうヒンドゥー教のホームマ儀



スヌワールという民族のブース(2017年)

礼（火に供物をくべる儀礼）の場をあらわしたものと、仏塔のなかに仏教徒の拝礼の場をあらわした展示がある。前者はブラーマンが、我々も国民であり同館で自らの文化を見せる権利をもつと抗議してきたため配置されたものだ。グ



ネパール民族誌博物館が入るツーリスト・サービス・センター(2017年)



第二展示場の開設式典に集まった演述担当者(2007年)

の考古局が所管する国立博物館のひとつではじつはない。政府の援助を受けているものの、人類学者で制憲会議員のガネシュ・マン・グルン氏が創設した私立の博物館なのだ。

同館はカトマンドゥ中心のツーリスト・サービス・センター二階という好立地にある。だが、ガイドブックでもあまり紹介されておらず、団体ツアーの行程に入ることさえもない。とはいえ、その成り立ちと存在自体が、現代ネパール社会の動態を考えるまたとな

ルン氏は「彼らの申し入れを仕方なく受け容れ、バランスに配慮し、仏教徒の展示も設けることにした」というが、この判断はネパールに暮らす人びとの諸文化を総体として見せる意味で正しいもので、かつ同館の価値を高めるものだった。社会的に排除され、虐げられてきたとされるマイノリティの民族が、彼／彼女らをこれまで排除してきた高カーストを排除しない寛容の精神。ここにこそ連邦民主共和国となった新ネパールにおける、この博物館の高邁な理想が表出されている。